

浦賀文化

第 35 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

観音崎

三浦半島の東端に位置し、浦賀水道に面する。付近は県立公園として整備され、豊かな自然が残されている。園内には灯台、砲台・弾薬庫跡が多く残る。神奈川の景勝 50 選に選ばれている。



成して襲い、大蛇が岩窟から出てきて船を転覆させるといっているので、里の漁師たちは恐れをなして困り切っていた。毎日のように帰って来ない夫があり兄弟があり子があつて、泣かない日は一日もなかった。

その名前からして、どこかに神々しさを秘めた響きを持つ観音崎には、名称の由来に伴う伝説が残されています。また、横須賀市が建立した十二番目の文学碑である「西脇順三郎詩碑」も灯台へ行く途中の海沿いに見られます。

観音崎にまつわる伝説をひもといてみましょう。ここには名前の由来となった観音様がありました。十一面観世音菩薩像といい、頭の回りに十一もの顔を持った観音様です。その観音様の物語をご紹介します。
「昔、観音崎の山の茂みにたくさんの鶴が集まって棲んでいた。この茂みの崖の岩窟には恐ろしい大蛇がいた。この鶴と大蛇とは、沖行く船を鶴が群れを

奈良に都が置かれていた天平十三年(七四二年)の春のこと、行基菩薩が諸国を巡ってこの地に足を止め、村人たちが泣き悲しんでいるのに出会った。そのわけを尋ねた行基は、仏法の威力でこの大蛇を倒した。観音様の像を刻んで岩窟のそばに安置し、大蛇の霊を鶴羽山権現として祀った。すると、不思議にも海上は安穏をつづけたという。里人たちは、観音様の御利益だと話し合い、お堂を建てて祀った。そして、その観音様は海上の舟をお守りくださるとして船守観音と呼ばれるようになり、海を職場とする人たちの信仰を集めた。
ところが和田義盛が北条氏により滅んだ和田の乱(建保元年・一二一三年)の折、この堂守がこっそりこの観音様を持ち出して

隠してしまった。これは大変だと大騒ぎになり、里人たちはあちらこちらと手分けして探し求めたが、一向に見つからず当惑していた。ところが、寛元二年(一二四四年)の夏のこと、漁に出ていた漁師が走水沖の磯の間から不思議な霊光がでているのを見つけた。その霊光を頼りに沖合を探すと、観音様が岩と岩との間に挟まれているではないか。我を忘れて海に飛び込みこれを取り出してみると、これこそ観音堂の本尊であった。さっそくこれを迎えてもとのようにお堂に安置して信仰したという。」
この観音様は、観音堂が取り壊されてから近年まで観音寺の本尊として祀られていましたが、残念なことに昭和六十年の火災で寺もろとも焼失してしまいました。
* * * * *
ノーベル文学賞の候補になった詩人・西脇順三郎は、当時小学生だったご子息の順一氏の遠足に同行した時に「灯台へ行く道」という詩を残しました。
このように美しい風景と詩情あふれる観音崎でしたが、東京湾入口に位置する要塞地帯として明治期から砲台が設けられていきました。しかし、現在では神奈川県立公園として整備され、彩り豊かな四季折々の風景は人々を魅了し、

さらに観音崎自然博物館における文化・教育活動、横須賀美術館の創設による芸術振興など、文化・芸術の発信地となっています。
また、鴨居地域に住む人々の手で、公園内に河津桜の植樹が行われています。いつか、早春の観音崎は桜の名所として知られることになるでしょう。

鴨居地域の恒例行事となった「観音崎フェスタ」は、今年も十一月三日に行われます。海岸に設置された舞台では、地元の人々による舞踊やガリバーファンタジー、そして町内会・自治会による模擬店など、盛りだくさんの企画を組んでいます。秋の日の一日を観音崎でお楽しみください。



西脇順三郎詩碑

★参考資料
横須賀雑考 横須賀文化協会



歴史 語りい座・浦賀 三十五

郷土史家 山本 詔一



●江戸湾海防の最前線を担う●

文政元年（一八一八年）五月にイギリス船ブラザーズ号が来航したことにより、文政二年三月から、それまで一人制であった浦賀奉行を二人制に改めた。これによって浦賀奉行所には必ず奉行が一人在駐することになった。

翌三年十二月、相模国御備場警備を担当していた会津藩が、その任務を解かれました。四年からは浦賀奉行所が中心となり、非常時には川越藩と小田原藩が駆けつけてくれる三浦半島の新しい海防体制が作られた。会津藩から浦賀奉行所が受け継ぐものは、観音崎、平根山の両御台場、城ヶ島の御台場は取り払い、遠見番所として使用することとなった。

こうした役務が増えたことで、伊豆下田から浦賀へ移転して以来百年間変わらなかった奉行の役料（奉行職についたことによる役職手当）が五百俵から千俵に倍増された。これに伴って奉行役知（役料として与えられた土地）は、奉行一人につき、千石与えられた。

当然、奉行以外の役人も増員する

ことになった。この時、増員となったのは、与力四騎と同心二十四人であったが、与力の息子四人を見習いとして役職につかせ、与力十八騎、同心七十四人体制となった。与力の息子たちは見習いであることから与力の年俸百俵の半分、五十俵を遣わした。ちなみに与力・同心の俸給も百年ぶりのベースアップであった。

与力の配置をみてみると、役所（奉行所）が四人、江戸在勤が二人、三崎が一人、番所が四人、台場が七人となっており、台場勤務に重きが置かれていくことがわかる。

台場勤務は日替わり案があつたが、それでは満足なことができないという意見が出て、三カ月から半年勤務とし、お手当として一人扶持を出すことになった。

また、砲術の稽古は最初から大きな筒でやるのではなく、十匁や二十匁から始め、師範役が筋がよいと認めた者だけが大きな筒の稽古をやればよいといっている。

もちろん、三浦半島の村々の支配津藩がきてから分郷扱いになっていた長瀬、久比里、吉井のエリアの人々

から元の西浦賀村への復帰の嘆願が出された。会津藩が駐留していた時代は、東西の浦賀と久村、佐原、三崎以外はすべて会津藩領となっていたが、新たに浦賀奉行の役知として、内川新田、岩戸、衣笠、小矢部、上平作、武、須軽谷、竹ノ下村の八か村が選ばれた。また、御預所（幕府から支配を委ねられている村）としては、鴨居、八幡、久里浜、野比、長沢、津久井、大矢部（ここまでは横須賀市）、上宮田、金田、菊名、松輪、宮川、毘沙門、原、東岡、城ヶ島（三浦市）が加えられ、浦賀奉行所の管轄区域が一気に広がった。

これらの村にはさまざまな役割が申し付けられた。通常時の御台場（観音崎・平根山）の役人夫、奉行交代時の人夫は、東西浦賀、鴨居、内川新田・久村など二十一か村に、三崎役宅と城ヶ島の遠見番所の役人夫は三崎、東岡などの八か村が役に付いた。

こうして、浦賀奉行所は江戸湾海防の最前線基地として役割を担うようになった。



笑話一題

旅行が好きで、時間を見つけては色々な所へ出かけています。移動中にいつもと違う景色を見ているだけでも、ゆつたりとした気持ちになります。日帰りで楽しめる三浦半島も大好きです。

冬の水仙、春の河津桜、菜の花、ソメイヨシノ。ゴールデンウィーク頃にはつつじや藤が咲き、ポピー・ネモフィラやラベンダー、バラも楽しみです。6月には花菖蒲やあじさい。夏のひまわり、秋にはコスモス。三浦半島は一年を通じてたくさんのお花たちが咲き競い楽しませてくれます。

満開の花情報と天気予報を確認して、もうひとつの楽しみ、食事やティータイムの場所もフリーペーパーやインターネットで探しておきます。『横須賀地産地消ショップガイドブック』も活用しています。ちよつとしたプチ旅行です。

そして、海の向こうにみえる冬の富士山も最高です。一日の始めに見えたときは今日一日が良い日になる予感がして晴れやかな気持ちになります。夕方に西の海岸から見える富士山と沈む夕陽は心穏やかにしてくれます。最近こんな素敵な三浦半島の良さを再認識しています。

浦賀コミュニティセンター分館

講座開催のお知らせ

歴史講座

「浦賀志録（下）を読む」

12/6・13・20、1/10・17（全5回）

毎回金曜日 13:30～15:30

山本詔一さんを講師にお招きし、貴重な郷土資料である『浦賀志録』を読み解き、歴史と文化を学ぶ講座を開催いたします。

広報よこすか、コミセンだより等で募集を行います。興味のある方は是非お申し込みください。